

# UNWTO遺産観光に関する国際会議 (International Conference on Heritage Tourism) 参加報告

公益財団法人日本交通公社 観光地域研究部 主任研究員 菅野 正洋

2016年2月24日(水)～26日(金)に、国連世界観光機関(以下、「UNWTO」と)と観光庁の共催による「UNWTO遺産観光に関する国際会議(International Conference on Heritage Tourism)」が奈良市で開催され、UNWTO賛助加盟員である当財団から筆者が参加した。

今回の国際会議では、地域の遺産を「どのように磨き上げ、魅せ、守るか」というテーマが掲げられ、主催者発表によると、36カ国から185人の参加があったとのことである。本稿では、会議当日の様子について報告を行うとともに、参加してきての若干の所感を述べてみたい。

## 会場の様子

会議は東大寺総合文化センターを会場として開催された。この会場は、世界文化遺産である東大寺に隣接して立地しており、通常の都市型の会場とはやや趣が異なる、いわゆる「ユニークベニュー」的な性格を有している。

駐車場に数多くの団体バスが並び、



東大寺駐車場に並び団体バス



会場となった東大寺総合文化センター

平日にもかかわらず国内外からの観光客があふれる東大寺はまさに「遺産観光の最前線」とも言えるもので

あり、そこで開催される今回の会議はとても臨場感あふれるものとなっていた。

## プログラム内容

会議当日の2月25日(木)午後

「保存と活用の両立」「観光資源の磨き上げ」「持続可能な活用につけて」という3つのセッションが、連続してそれぞれ1時間40分ずつ設けられ、各セッションでは、国内外からの発表者から取り組み事例の紹介を中心としたプレゼンテーションがなされた。また、各プレゼンテーションに対しては、会場の参加者からも質問が出て、活発な意見交換が行われていた(表)。

以下、日本からの発表内容を中心に紹介する。

まず、「保存と活用の両立」のセッションでは、北海道大学観光学高等研究センターの西山徳明教授より、沖縄県・竹富島におけるNPO・DMOによる遺産管理の事例が紹介されるとともに、「リビングヘリテージ」「市民遺産」といった新たな概念が紹

介され、参加者の活発な質問を集めていた。

また、「観光資源の磨き上げ」のセッションでは、一般社団法人日本旅行業協会（JATA）の越智良典事務局長より、奈良や京都、日光、広島、沖縄といった世界遺産地域を訪ねることの多い日本の修学旅行の事例紹介があり、参加者の質問を集めていた。さらに、一般社団法人田辺市熊野ツーリズムビューローの竹本昌人事務局長より、田辺市における外国人観光客を対象としたプログラム開発や、環境整備の取り組みが紹介された。

最後の「持続可能な活用に向けて」のセッションでは、観光庁の長崎敏志観光資源課長より、白川郷における遺産管理の取り組み事例が紹介された。

なお、海外からの参加者から日本人スピーカーに向けて、近年の我が国の外国人観光客数の急増の要因について質問が寄せられる場面が見られるなど、遺産観光の面だけでなく、近年の我が国のインバウンド政策の現状についても、海外からの参加者にとっては関心が高い事項として捉

えられていることが感じられた。

さらに、コーヒープレークの会場を兼ねてポスターセッション会場が設けられるなど、期間中随所で参加者間の意見交換や交流が図られるよう意識したプログラム構成になっていたことも印象的であった。

### 2月24日（水）の夜

会議以外の行事としては、JR奈良駅に隣接するホテル日航奈良を会場として、観光庁主催によるウエルカム・カクテル・パーティーが開催された。

### 2月25日（木）の夜

会議終了後、奈良ホテルを会場として、奈良県の主催によるレセプションが開催された。この場では、相撲発祥の地として知られる葛城市で活動する「けはや相撲甚句会」による相撲甚句の実演が行われ、海外の参加者は興味深く鑑賞していた。

### 会議翌日の2月26日（金）

筆者は都合により参加できなかったが、奈良県内へのテクニカルツアーが実施され、石舞台古墳や民家ステイなどを視察する「明日香村コース」と、相撲発祥の地に触れる「葛城市

表 会議（2月25日〔木〕）のプログラムと登壇者（敬称略）

<b>オープニングセレモニー</b>	
古澤 ゆり	国土交通省観光庁審議官
黄 海國	UNWTOアジア太平洋部副部長
浪越 照雄	奈良県 副知事
<b>セッション1 保存と活用の両立</b>	
モデレーター:	
加藤 久美	和歌山大学観光学部教授、副学部長、国際観光学研究センター設置準備室副室長
スピーカー:	
ドナルド・ホーキンス	ジョージワシントン大学教授、UNWTOアドバイザー
ムニール・ブシュナキ	国連教育科学文化機関（UNESCO）アラブ地域センター所長
西山 徳明	北海道大学観光学高等研究センター センター長
<b>セッション2 観光資源の磨き上げ</b>	
モデレーター:	
ハーモニー・ラム	UNWTOアジア太平洋センター 事業・広報課長
スピーカー:	
越智 良典	一般社団法人日本旅行業協会（JATA） 理事・事務局長
竹本 昌人	一般社団法人田辺市熊野ツーリズムビューロー 事務局長
アマルスワル・ガラ	クィーンズランド大学地球変動研究所 教授、インクルーシブミュージアム（オーストラリア・インド） 所長
<b>セッション3 持続可能な活用に向けて</b>	
モデレーター:	
高橋 良明	国土交通省観光庁 参事官（国際関係）
スピーカー:	
ジョルディ・トセラスファン	バルセロナ大学 遺産創造文化観光研究所（LABPATC） 所長
ソック・サンパー	アンコール地域遺跡保護管理機構（APSARA） 副総裁
長崎 敏志	国土交通省観光庁 観光資源課長



セッションの様子



レセプション（奈良県主催）の様子

コース」の2コースに分かれて、奈良県の特徴的な地域資源の魅力や取り組みの現状を知ってもらう機会が設けられた模様である。

## なぜ今「遺産観光」か？

ここで改めて今回の国際会議の背景について確認しておきたい。

UNWTOが会議開催にあたって公表しているコンセプトノートを参照すると、今回遺産観光に焦点を当てた国際会議を開催する背景は、次のように示されている（筆者にて引用して和訳）。

### 【背景】

文化遺産や自然遺産は観光において鍵となる要素であるが、遺産の概念は過去にあった有形のものから、日常や記憶といった無形のものにまで拡大してきている。

時として、コミュニティはその歴史や保有する遺産が、価値の高い魅力や地域資源として十分なポテンシャルを有していることを認識していない。

遺産観光を促進しつつ保護して

いくためには多くの関係者の参画によるアプローチが不可欠となる。2015年2月に、UNWTO、国連教育科学文化機関（UNESCO）と各国の観光・文化を所管する大臣、研究者、メディア、民間セクターがカンボジアのアンコール遺跡に程近いシエムリアップに会し、「UNWTO/UNESCO観光と文化に関する世界会議（World Conference on Tourism and Culture）」を初めて開催した。この会議では、観光が雇用創出や地方と都市の再生、自然遺産や文化遺産の鑑賞や保護といった取り組みを通じて、包括的な経済成長と持続的な開発のための計り知れない機会を生むという点が認識された。

遺産という資源を観光目的で活用することには多くの機会がある一方で、劇的な来訪者の変化が課題を生じさせる。そのため、コミュニティは来訪者に真正で質の高い経験を提供する一方で、保全をも一層意識するようになる。このように、観光を持続的に管理していくことは、観光地の競争力を維持するために最も求められている課題の一つである。

今回の国際会議は、前述のような背景を踏まえ、世界の宝を磨き上げ、魅せ、守っていくために参考になるであろう世界の先進的な取り組み事例を、観光産業、政府関係者、研究者、地域コミュニティ代表、国際組織に提示する機会として設定されたものである。

## 国際的な観光分野における日本ならではの貢献に向けて

ここで、今回の国際会議が我が国で開催されたことの意義についても考えてみたい。

今回の会議のテーマは、地域の遺産を「どのように磨き上げ、魅せ、守るか」というものであった。これは、我が国において、観光地域づくりやエコツーリズムに対する取り組みなどを通じて培われてきた、ある意味「お家芸」的な分野とも言える。

そのようなテーマが国際会議のテーマとして正面に掲げられ、なおかつそこに参加者も高い関心を寄せていたことは非常に意義深いものであ

ると考える。

2015年9月に開催されたUNWTO総会において、中国、韓国、タイとともに、アジア地域に割り当てられている4議席の1つを得て、実に25年ぶりに日本がUNWTOの理事国に就任したことは記憶に新しい。かねてから、国際的な観光分野における日本のプレゼンスが低いことが指摘されてきたが、ここに来て日本が一定の発言権を持つ理事国となったことよって、観光分野における国際的な課題により深く関与することが可能となり、観光庁では、我が国の観光政策をインプットしていくことで、国際的なルールの確立や標準化などに貢献していくとしている。

その意味では、地域の遺産を「どのように磨き上げ、魅せ、守るか」という面においても、今回のような会議開催の機会も積極的に活用しながら、我が国に蓄積されたさまざまな知見を海外に向けて発信・導入していくことが可能であり、国際的な観光分野における日本ならではの貢献のためには非常に有効であると感じた次第である。（かんの まさひろ）